

# 六甲山自然案内人の会 平成24年7月定例観察会報告書

実施日：平成24年7月8日（日）

コース：掬星台～穂高湖～シェール槍～新穂高～掬星台

テーマ：摩耶山で上高地の雰囲気（3班担当）

参加人員：ビジター30名、会員36名、合計66名

当日の配付資料：コース地図、植生リスト

## 【概要】

金曜日までの大雨が上がり、絶好のハイキング日和。梅雨の晴れ間を待ちわびていた山男、山ガールが集い、総勢66名の参加。ビジターさんを3班に分け、会員グループと併せて4班で順次スタート。時折吹いてくる涼やかな風と、この時期にしては珍しくからっとした陽気で、大正池のある上高地、槍、穂高と言った北アルプスに思いを馳せることができた。

## 【観察記】

### 1. 掬星台から穂高湖まで

掬星台をスタートしてヤマナシ、キャラボク、メギ、階段を下りて、ピンク色の花をつけたシモツケを観察。春に花咲くアキグミ、秋に花咲くツルグミ、和紙の原料となるミツマタをみてオテル・ド・摩耶に向かう山道へ。山道では、ヤマコウバシの葉を嗅ぎ、イヌザクラの花の説明を受け、ネジキ、アセビの下をとおりオテル・ド・摩耶に到着。駐車場でイタチハギとヤマハギ、天上寺裏のアカマツに絡みついた大きなツタウルシ、鉄塔付近のフタリシズカをみてアゴニー坂を下る。途中、シラキの群落、坂を下ったところにツクバネソウ。

車道を柚谷峠に向かう。翼果を付けたウリハダカエデ、紅白の花をつけたハコネウツギ、薄紫色の花をつけたムラサキシキブなどを観察して、柚谷峠でトイレ休憩。穂高湖へ下って昼食（一部の班は、そのままシェール槍に向かい、穂高湖堰堤下で昼食）。

### 2. 穂高湖から新穂高まで

穂高湖北岸を通り、シェール槍の登り口へ。細く急な坂道を注意深く上り、わずか5分ほどで643.2mの頂上へ。頂上は狭く15人ほどで超満員。眺望は抜群、眼下に穂高湖、同じ目の高さで六甲山牧場とこれから登頂予定の新穂高を臨み、来た道に戻る。頂上付近にはヤマツツジの花がまだ咲いていた。さすが標高の高い「槍」といったところであろうか。

穂高湖堰堤近くの東屋付近にはウツボグサの群落。シェール槍の疲れが紫色の花に疲れ

が癒される。この群落が終わるとシェール道との分岐（一部の班は、さらにシェール道を西進して植物観察）。ミヤコザサをかき分けていくと沢を渡る。先日までの雨のため水量が多く、置石を飛ぶのに一苦労。徳川道と合流して西進。新穂高に向かう小路との分岐点を右に入りミヤコザサの踏み分け道を登る。人通りが少ないためか、道幅狭くササが胸の高さまで迫る個所あり、またササに混じってヤマウルシ（樹液でかぶれる）、サルトリイバラ（棘で傷つく）などの危険植物が顔の間近に迫り注意が必要な道だ。上り下りを繰り返し、分岐から30分ほどで642.8mの新穂高山頂へ。見晴らしはよくないが、東にシェール槍、六甲山牧場が木々の間から見える。頂上付近にスノキの実。



穂高湖からシェール槍



シェール槍山頂



シェール槍山頂から穂高湖



シェール槍山頂付近のヤマツツジ



新穂高山頂

### 3. 新穂高から掬星台まで

来た道に戻る。ササに覆われ足元が良く見えないので、横たわっている木の根に足を滑らせ、しりもちをつく人が続出（出発前に注意事項として説明したのだが）。

摩耶山に向かう分岐から車道まで、コクサギ（葉の付き方が独特）、ヤマアジサイ（花が満開）、コナスビ（黄色の可憐な花）などを観察。

車道に出たからは歩道沿いに掬星台に向かう。右手には、先ほど踏破した新穂高が雄大な姿を見せる（ここは征服した満足感で眺める）。このコースは、樹木を上から観察できる場所として有名だ。花が咲いていたものとして、アカメガシワ、クマノミズキ、イワガラミ。実が付いていたものとしてオオバヤシャブシとヒメヤシャブシ。ヤシャブシ類は、かつての禿山を植林した時代に優先的に植えられた植物の子孫。天上寺駐車場横のエゴノキには多数のエゴノネコアシ。これはエゴノネコアシアブラムシが作った虫こぶで、このエゴノキは、毎年（少なくとも3年連続）虫こぶができています。

ここまでの歩道沿いには随所にアジサイが植栽されていた。花の最盛期でもあり、ブル

一、ピンク、白、紫など各種の色の装飾花で迎えてくれた。掬星台近くの自然観察園に沿った道沿いには、シチダンカを見ることができた。

#### 【後記】

槍や穂高は北アルプスの名峰だ。シェール槍や新穂高の名前の由来を調べたが、よくわからなかった。新穂高から桜谷出合方面に下る道は、今回利用した尾根筋の道とは異なり、岩場の多い急斜面で道もわかりにくい箇所がある。新穂高をまた登ってみようという方は注意していただきたい。このルートには新穂高の他にピークが幾つかあるので、これらを前穂高、奥穂高などと命名すれば、名前にひかれて登る人も増え、コースも整備されるのではないかと、いろいろ思いが膨らむコースであった。